



Data

監督: 白石和彌
 原作: 沼田まほかる『彼女がその名を知らない鳥たち』(幻冬舎文庫刊)
 出演: 蒼井優/阿部サダヲ/松坂桃李/竹野内豊/村川絵梨/赤堀雅秋/赤澤ムック/中嶋しゅう

👁️👁️ みどころ

『ユリゴコロ』(17年)に続いて、沼田まほかるの原作が映画に! 前作も異色で気味の悪い映画だったが、本作もタイトルからしてヘン!

本作は「本格的な大人のラブストーリー」ながら、「共感度0%、不快感100%」の映画らしい。そして、ヒロインが“共感度0”の“最低な女”なら、共演する男たちは、“下劣な男”、“ゲスな男”、“クズな男”の3人。そりゃ一体ナニ?

そんな映画が、「おおさかシネマフェスティバル2018」では作品賞、監督賞、主演女優賞の三冠をゲット。それは一体なぜ? 「共感度0%、不快感100%」でも、あと味の良さをしっかり味わいたい。



■□■この奇妙なタイトルの原作は? 監督は? ■□■

近時は、小説も映画もやたらタイトルの長いものが多いが、本作もその一つ。しかも、『彼女がその名を知らない鳥たち』は長いだけでなく、その意味もサッパリわからない。ところが、この奇妙なタイトルの原作は人気作家・沼田まほかるの傑作ミステリーだということからビックリ。チラシでは「ラブストーリーに夢を見られなくなった大人の女性たちに『究極の愛とは何か』を突き付け、読者を虜にした沼田まほかるの人気ミステリー小説『彼女がその名を知らない鳥たち』(幻冬舎文庫)がついに映画化。」と絶賛されている。沼田まほかるの原作を映画化した『ユリゴコロ』(17年)もかなり異色で、かなり気味の悪い映画だった(『シネマルーム40』110頁参照)が、「本格的な大人のラブストーリー」とされた本作も、2人の主人公のキャラが超異色であるため、かなり異色なラブストーリー

になっているらしい。

他方、本作を監督したのは『凶悪』（13年）、『日本で一番悪い奴ら』（16年）の白石和彌。宮本太一・新潮45編集部編の原作『凶悪—ある死刑囚の告発』（新潮文庫刊）を映画化した『凶悪』では、ピエール瀧演じる主人公・須藤純次と、リリー・フランキー演じる「先生」こと木村孝雄の凶悪ぶり、悪人ぶりが素晴らしかった。そして、それは園子温監督の『冷たい熱帯魚』（10年）（『シネマルーム26』172頁参照）で個性派俳優・でんでんが見せた悪人ぶりや、主人公・村田の悪人ぶりにも比肩しうるものだった。そのため、私は「さすが若松孝二監督の薫陶を受けた白石和彌監督の手腕に拍手！」、と書いた（『シネマルーム31』195頁参照）。

さあ、そんな白石和彌監督が、沼田まほかるの人氣ミステリー小説をいかに映画化・・・？

■□■ “嫌な女” を演じる主演女優は？ ■□■

「本格的な大人のラブストーリー」となれば、その主役は美男と美女。相場は普通そう決まっているが、何と本作のチラシには、「共感度0の最低な女と男が辿りつく“究極の愛”はきっと、あなたの愛の概念を変えるだろう」、と書かれているから、アレ・・・。そしてまた、そんな“共感度0”の“最低な女”を演じる主演女優は一体誰？ そんな嫌なヒロイン役は人気美人女優なら誰もが嫌がるのでは・・・？ そう思っていると、なんと本作の嫌な女（ヒロイン？）北原十和子を演ずるのは蒼井優だからビックリ！

蒼井優は岩井俊二監督の『花とアリス』（04年）（『シネマルーム4』326頁参照）でのバレエの演技できらりと光る実力を見せ、李相日監督の『フラガール』（06年）（『シネマルーム12』52頁参照）では日本アカデミー賞最優秀助演女優賞、新人女優賞などを総なめにした女優。山下敦弘監督の『オーバー・フェンス』（16年）ではオダギリジョーと共演し、超異質なヒロイン像を見事に演じていた（『シネマルーム38』66頁参照）。

そして、『百万円と苦虫女』（08年）では彼女は大きく演技派としても成長しており、同作でのやるせない演技に感心した私は、“演技派女優”蒼井優の確立を期待”、と書いた（『シネマルーム20』324頁参照）。さらに、近時山田洋次監督に見出された彼女は、『家族はつらいよ』シリーズに出演し、山田組の常連となっている。

このように、14歳でデビューした後順調に成長し、今や“好感度ナンバー1”女優になっている蒼井優が、何と本作では“嫌な女”役に挑戦！ しかして、本作で蒼井優が見せる北原十和子の“嫌な女”のレベルは・・・？

■□■ 下劣な男は？ ゲスな男は？ クズな男は？ ■□■

本作冒頭には、15歳年上の男・陣治（阿部サダヲ）と暮らしている十和子の姿が登場する。十和子は8年前に別れた黒崎（竹野内豊）のことが忘れられないまま、不潔で下品な陣治に嫌悪感を抱きながらも彼の少ない稼ぎに頼って働きもせずに怠惰な毎日を過ごし

ているらしい。チラシには陣治を“下劣な男”と形容しているが、冒頭のシーンではそれ以上に不潔さと下品さが目立っている。したがって、こんな役を演ずる阿部サダヲも大変だ。彼は、西川美和監督の『夢売るふたり』（12年）では松たか子がプロデュースする結婚詐欺の実行役を小気味よく演じていた（『シネマルーム29』61頁参照）が、2017年のNHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』の徳川家康役は一年間を通してイマイチだった。また、『奇跡のリンゴ』（13年）は予告編だけ何度も観たが、そこでは彼特有の癖のある演技が目立っていた。そんな阿部サダヲの演技には賛否両論だろうが、演技力は大したものだから、本作の陣治のような“下劣な男役”はびったり・・・？

他方、今を時めく俳優・松坂桃李は映画では『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマルーム39』28頁参照）、『映画 真田十勇士』（16年）（『シネマルーム39』290頁参照）等々、テレビでもNHKの朝ドラ『わろてんか』等々、その活躍は目覚ましい。その彼も、本作では何と“ゲスな男”水島真役に挑戦！十和子が妻子持ちの水島との情事に溺れたのはどこか彼に黒崎の面影があったためだが、刑事から黒崎が行方不明だと告げられると、ひょっとしてその犯人は陣治ではないかと疑ったのはやむを得ない。さらに、十和子のかつての恋人だった黒崎は、スマートで羽振りも良いが、上昇志向が強く自身の出世、保身のためなら女を道具に使うことも厭わない男。そのため別れる時は十和子の心にも体にも傷が残る手ひどい仕打ちをしたらしいから、チラシではこの男は“クズな男”と形容されている。

このように、本作は蒼井優演じる“嫌な女”に“下劣な男”、“ゲスな男”、“クズな男”が絡まるラブストーリーでありながら、殺人事件が絡まるミステリー。しかして、その展開はいかに・・・？

■□男もやはり顔？いやいや、誠意と真心？！■□

映画は目で見て耳で聞く芸術。もっとも、近時はそこに風、噴射、水しぶき、地響き等を感じさせ、さらにはシーンに合わせた香りまで劇場内に漂わせる装置を備えた特別な劇場（4Dシアター）も用意されており、私は一度だけそこに入ったことがある。もし本作をその劇場で観たら、阿部サダヲの汚れた足や靴下の臭いにおいまで感じることになりそうだが、さてその成否は・・・？本作では陣治の徹底した汚さが顕著だが、他方でトコトン十和子に尽くす誠意と真心も顕著だ。しかし、誠意、真心とストーカーとの線引きは微妙だし、いくら誠意と真心を尽くす陣治だって嫉妬心はあるはずだから、十和子の見えないところで陣治は水島や黒崎に対して一体何を・・・？

他方、本作では冒頭からベッドに寝っころがったままで購入した商品にいちやもんをつける十和子の“達者ぶり”が目立っている。近時は、物販店のみならず医療の世界でも法曹界でもこの手の“クレーマー”が花盛り。それを困ったご時世だと思っている私には、本作にみるそんな十和子はまさに“嫌な女”そのものだ。しかし、買った時計にいちやも

んをつけてくる十和子に対しても、あくまで誠実に対応しているデパートの時計売り場の販売員・水島を見ていると、これぞサービス業の模範社員と思えてくる。このように、あくまで腰を低く顧客サービス第一を徹底させる水島が十和子に気に入られたのは当然だが、それ以上に水島がスマートでハンサムだったことが大きな要因だろう。そう考えると、男は顔ではなく誠意、真心が大切だと言われているが、男もやはり顔、いやいや、誠意と真心・・・？

本作中盤における、陣治と水島を巡って微妙に揺れ動く十和子の女ゴコロを見ていると、それがわからなくなってくるのは仕方ない。もっとも、本作では顔やスタイルのみならず、心もまっすぐに見えた水島にも、その実ドロドロした汚い内面があったことが明らかになってくるので、本作後半からは、それに注目！

■□■共感度0%、不快度100%、でもあと味は？■□■

「あなたはこれを愛と呼べるか」、「共感度ゼロの最低な女と男が辿りつく“究極の愛”とは」、「このラストは、あなたの恋愛観を変える」。これらを“うたい文句”にした本作の「恋愛面」における到達点は、きっとハッピーエンド・・・？つまり、己の愛を全うするため、十和子にとって最悪な男である黒崎を殺しても、それは神が赦してくれるはず……。そんな展開と結論になれば、“沼田まほかる風”ではなく、“ドストエフスキー風”だが、さて本作の到達点は？それは、しっかりあなた自身の目で。

ちなみに、その点についての本作公式サイトへのイントロダクションの記載は次のとおりだ。

肌にとまわりつくような不穏で不快な空気を漂わせながらも、物語はあまりにも美しい“究極の愛”へとアクロバティックに着地していく。誰も裁くことができない予想を超えたラストを見届けたとき、観る者の胸に驚きと感動が広がる、まぎれもない愛の物語が誕生した。

他方、“ミステリー”として本作を観た場合、黒崎殺しの犯人捜しとその動機が大きなポイントになるが、それについても、あなた自身の目でしっかりと。ちなみに、その点についての本作公式サイトへのイントロダクションの記載は次のとおりだ。

十和子への過剰な愛ゆえに陣治は黒崎を殺したのか。異常な献身と束縛の先には、水島に手をかけ、十和子を追いつめる不吉な未来が待っているのか、それとも――。

■□■大阪シネフェスでベスト1に！主演女優賞もゲット！■□■

私は約10年間映画ファンのための映画まつりである「おおさかシネマフェスティバル」のベストテン投票メンバーを務めている。そして、2018年3月4日に開催された「お

「おおさかシネマフェスティバル2018」で本作は見事作品賞に選出された。ちなみに、日本アカデミー賞の作品賞は『三度目の殺人』（17年）（『シネマルーム40』218頁参照）、2017年第91回キネマ旬報日本映画ベスト・テン第1位は『夜空はいつでも最高密度の青色だ』（17年）だったから、「おおさかシネマフェスティバル」の独自性が顕著だ。ちなみに、私は1位を『あゝ、荒野』（17年）に、2位を『幼な子われらに生まれ』（17年）（『シネマルーム40』102頁参照）に、3位を本作にしたが、計32名のベストテン投票メンバーの総意として本作がベスト1、作品賞に選ばれたのだから立派なものだ。

さらに特筆すべきは、昨年『オーバー・フェンス』で主演女優賞に選出された蒼井優が、今年も本作で2年連続の主演女優賞に選ばれたこと。『幼な子われらに生まれ』で助演女優賞に選出された田中麗奈と共に授賞式に参列した蒼井優の美しさはひとしおだった。

白石和彌が監督賞も受賞したから、「おおさかシネマフェスティバル2018」では、本作が作品賞、監督賞、主演女優賞の三冠を受賞したことになる。そのこともあって、本作については鑑賞直後の2017年11月6日にショートコメントを書いていたが、本日あらためて詳しい評論を書くことに。

2018（平成30）年3月9日記